

Close Up!
go! 2016



スラして、緩急で
公立から甲子園!

私立とは違う、僕らのやり方



川和

[県立]

夏の1回戦敗退から、秋は県大会初のベスト8入り。
キャプテン・中間峻登を中心に、全員野球で戦った結果だ。
勝たなければ得られなかった財産を元に、この冬は選手同士が考え課題に取り組んでいる。
その様子を、伊豆原監督はジッと見守っている。

撮影・取材・文/大利実

屈指の進学校というイメージを打破する明るさ。元気出そうぜ!の声で一瞬でまとまり、1発芸も次々に出てくる賑やかな大きさ(撮影/榎本ゆき)



練習が切り替わるたびに、選手間でミーティングを開き、「何のためにやるのか」を確認。「何となく」な練習をしないようしている



グラウンドは他の部と共有。「普通の部活動の環境」から甲子園を目指すことに意味に、選手たちは大きな夢と、使命感を抱いている



1977年生まれ、愛知県出身の伊豆原監督。愛知県立瑞穂一信州大学。現役時代はピッチャーで活躍した。担当教科は数学

「1試合27球で終わってもいい。そのぐらいの意識で振っていかねば、うちが私立に勝つことはできません」

「ピッチャーは必ずしもかかえていません。速球を投げられるわけではないので、いかに緩急でずらすかです」

「放課後練習は19時まで。私立が10球で休得するところを1球で休得する。100球なら、うちは10球です」

2015年秋の県大会で、2007年夏に続くベスト8入りを果たした川和。準々決勝で藤沢翔陵に2対8で敗れたあと、伊豆原真人監督からこんな言葉を耳にした。このときが取材。「面白い監督」とウワサでは聞いていたが、なるほど! 「守って守って、ロススコアで競り勝負」なんてことは微塵も思っていない。

藤沢翔陵戦でも、初回の先頭打者・真下健人が初球のカーブを打ってライト後方へのフライ。二番・清水大佑も2球目のファーストストライクを逃さずに振って、レフトフライ。ただ振るだけでなく、打球に角度を付けて長打を狙う意識がしっかりと浸透していた。

後日、学校を訪ねると、グラウンドは多数の運動部で賑わっていた。レフトのあたりには陸上部とラグビー部、センターではサッカー部が活動している。

多数の選手が練習後、塾に通う
OBには東大野球部1年の三鍋など

学校は県内トップクラスの進学校。2013年夏に主軸を打っていた三鍋秀悟は、一浪のすえに東京大学に合格し、硬式野球部でプレーしている。「部活が19時に終わって、20時から塾に行く子は

ほとんどです。伝統的に現役での大学合格が多く、昨年は13人いた3年生のうち12人が現役合格でした。朝練を7時からやっているんで、ギリギリのなかで頑張っている子が多いですね」

限られた環境のなかで、何をやるか。1球で休得するためには、どんな取り組みが必要なのか。

「頭での理解と、体の表現のギャップをどれだけ埋められるかです。ギャップが小さいほどいい選手。チームで作った基準に対し、できているかできていないかを評価するようにしています」

取材で印象に残ったのは、メニューが始まる前と終わった後に、選手同士のミーティングが聞かれていたことだ。

「理解力が高く、考えてできる子が多い。ぼくが口を挟むと、ぼくの言葉になってしまおうのでイヤなんです。極力、口出ししないようにしています」

進学校に通う生徒の特徴を、チーム作りに生かしている。

ベスト8に入ったが、結果に満足しているものは誰もいない。

「強く振ることは自信を持っている。ファーストストライクを積極的に振る野球で勝ちたい」(三番・中間峻登)

「私と練習量で張り合っても勝てないので、短時間でどれだけ試合を想定できるか(四番・石津純輔)」

11月には、三重で行われた「ベースボールフェスタ練習試合in熊野」に初参加。地元校と練習試合をし、創志学園、健大高崎、関東一など、強豪校の試合に対する振る舞いを見て刺激を受けた。

私学と同じことをやっているのは、神奈川は勝ち抜けない。川和らしさを全面に押し出し、夏の甲子園を勝ち取る。